

■いわて文化ノート

奥州南部の医師 川村寿庵をめぐる

主任専門学芸員 齋藤里香

■川村寿庵は江戸の大医なり

南部領の出身で、江戸で町医者をしていた川村寿庵(?-1815)は、知る人ぞ知る市井の名医でした。儒学者・増島蘭園(1769-1839)は、その著書『いはいんくうき燕偶記』に「川村寿庵江戸大医也」と記しています。寿庵は自らの医术をつつみかくしているため、凡庸な医者とみる者がいると蘭園は惜しんでいますが、没後に『皇国名医伝』という本にもとりあげられていますから、やはり名声は高かったのでしょう。

松浦静山(1760-1841)の随筆『かっしやむわ甲子夜話』には、大学頭・林術斎(1768-1841)が語った寿庵にまつわる様々なエピソードがつつられています。往診は自宅から数百メートルの範囲内、診療は早朝からひ日の刻(午前10時頃)までと決め、その後は笛を携えて管弦の集りに行っていたこと、ある時御三卿の清水殿(徳川重好)の診察を依頼されたこと、由緒ある楽器を所蔵していたこと、天明の飢饉の折に蔵書を売り払い、郷里の親類縁者を助けたこと、大の山好きで富士山にも幾度か登り、自宅の屋根にはたな架を作って朝起きるとそこから山を眺めていたこと、谷文晁が描いた山の画集を出したことなど。

文晁(1763-1840)による山の画集『な名山図譜』(1805年出版)は、後に『な日本名山図会』と改題され、明治に至るまで版を重ねたロングセラーです。寿庵はこの画集を世に出した人物としても名を残しています。

■『日本名山図会』には岩手山が二つ

山好きの寿庵は、国内の景勝地の絵を数十幅も所蔵していました。その中から選んだ絵を文晁が縮写して原画をつくり、木版刷りの本にしたものが『な名山図譜』です。

『な名山図譜』には初め、北海道から九州までの各地の山の絵が88図収められました。南部領の山は、「い臥釜山(釜臥山)」「あ青森県」、「し七時雨山」、「い巖鷲山(岩手山)」、「な南昌山」、「は早池峯」[岩手県]の5図でした。

文化4年(1807)、寿庵の次男・博の要望により、巻末に「い磐手山(岩手山)」と「たま東山(姫神山)」の2図が追加されます。

最初の岩手山の図は、文晁の弟元旦が郡山駅(紫波町日詰)から見て描いた絵がもとになっていました。博は、岩手山は「一邦の鎮」であるから盛岡城下から見たものを、また、南部の名山である姫神山をと望み、文晁に新たに描いてもらったのです。

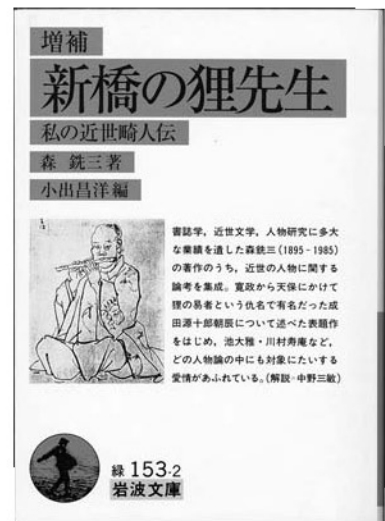
こうして、2図を追加後に刷られた『な名山図譜』と『な日本名山図会』は、岩手山の図が二つになりました。



『な日本名山図会』(当館蔵)
上 巖鷲山
元旦が郡山駅で描いた図をもとにしている。
下 磐手山
博の要望により追加されたもの。

■川村寿庵の再発見

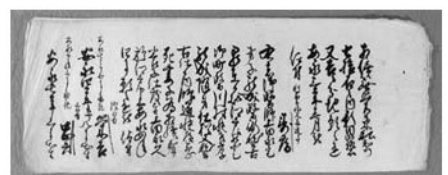
寿庵の伝記については、学芸史家・森銃三氏(1895-1985)による研究があり、『あ増補 新橋の狸先生』(岩波文庫)にも論考が採録されています。本のカバーカットは、谷文晁が描いた寿庵の肖像です。



森銃三『増補 新橋の狸先生』(岩波文庫)
カバーカットは谷文晁筆「川村寿庵肖像」

しかし、知る人ぞ知る川村寿庵ではありませんが、その素性や経歴についてはほとんど研究が進んでいませんでした。生年は不明、命日は墓碑の報告(伊藤武雄「川村寿庵墓所記」『え画説』18号、1938)から文化12年(1815)4月28日とみられますが、現在はその墓石も確認できないとのこと。出身地は『こ国書人名辞典』(岩波書店)に盛岡とありますが、実際はそれも違っていました。

岩手県立図書館にある「い医家略伝」と盛岡藩医・八角穆斎(1863没)の随筆『ち塵袋』、そして『あ盛岡市史』によれば、寿庵の出身地は三戸。そこで、青森県の三戸町立図書館・相馬英生氏のご協力を仰いだところ、盛岡市中央公民館所蔵の「し諸士由緒帳」から、川村寿庵の生家の家系が判明。寿庵が三戸御給人・川村又左衛門の孫であることや、盛岡藩医・上田永久の弟子で、医学の稽古のため江戸へ上り、安永4年(1775)に江戸御町医・川村快庵の跡式を相続したことなどがわかりました。



『し諸士由緒帳』(盛岡市中央公民館蔵)

また、「塵袋」には、寿庵が盛岡で脚氣の治療に功績をあげたこと、晩年は聾になったこと、川村家で「江都の水」という顔の薬を処方したことなど、『甲子夜話』にはないエピソードも記されています。(※当時江戸では、戯作者・式亭三馬の薬屋が出す「江戸の水」という化粧水が評判をとっていました。川村家処方の「江都の水」がこれにあたるのではないかと期待しているのですが、今のところつながりません。)

他の資料により、軽米や盛岡から、江戸の寿庵に弟子入りを志願した者がいたこともわかりました。

さらに、盛岡藩家老席日誌「雑書」(盛岡市中央公民館蔵)を調べたところ、驚くべき事実に出会いました。そこには、江戸に上った寿庵が御町医・安藤昌益のもとで稽古したとあったのです。安藤昌益といえば、「自然真堂道」の著作で知られる人物が思い当たります。現在の秋田県大館市出身の医者で、一時八戸で開業していました。寿庵はこの昌益に入門したのでしょうか。

■安永の安藤昌益

「雑書」安永4年(1775)4月2日の記事の文意を要約すると次のようになります。

上田永久は一昨年、弟子の川村寿庵を連れて江戸に上り、3年の予定で御町医安藤昌益のもとで稽古させていた。寿庵はさらに昌益の師匠川村快庵の門弟となったが、今年正月に快庵が病死。快庵には老母と娘がおり、寿庵を婿にして跡を継がせたいと望まれたため、そのようにしたいと永久が願い出、許された。

実は、近年の研究により、寿庵と次男の博(真斎)は昌益の医学の継承者であることが解明されています(安藤昌益の会『直耕』27・28号、『安藤昌益と千住宿の関係を調べる会通信』17・18号ほか)。寿庵と昌益には接点があったのです。

ところが、昌益の没年は宝暦12年(1762)。寿庵が江戸に上ったのは安永2年(1773)ですから、それより10年以上も前に死んでいます。とすると、「雑書」に登場する安藤昌益とはいったい誰なのでしょう。もしやこの時、昌益はまだ生きていたのでしょうか。それとも、二代目でしょうか。二代目とすれば、寿庵は初代昌益といつどこで出会ったのでしょうか。

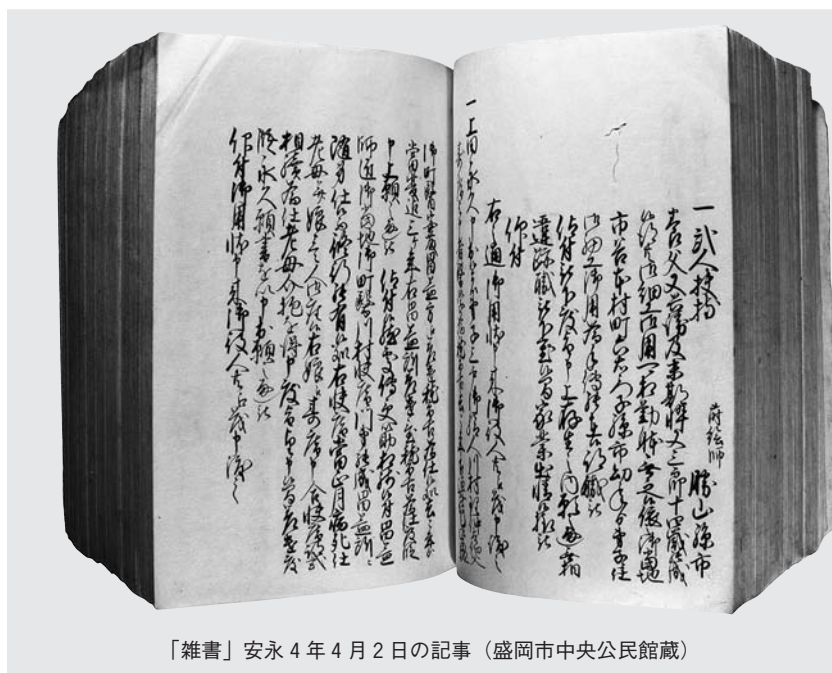
安永の安藤昌益の出現は、新たな事実とともに新たな謎をもたらしました。

■川村寿庵とは何者か

寿庵の周辺を探っていくと、いろいろな疑問がわいてきます。交際のあった林述斎は幕府の儒官の長ですし、『名山図譜』の序文を書いた儒学者・柴野栗山(1736-1807)は、寛政の三博士に数えられるほどの人物です。田舎出の一介の町医者が、なぜこのような高名な学者たちと付き合えたのでしょうか。その上、趣味は笛と読書と山で、楽器や書物、絵画を収集していました。相当なお金持ちだったのでしょうか、町医者がそれほど儲かるとも思えません。安藤昌益との関係にも謎が残ります。

森銃三氏は、戯作者・曲亭馬琴(1767-1848)の日記に寿庵の名があることも指摘されています。調べを進めると、どうやらこちらは寿庵の二代目のようです。長男の公実が親の名を継いだ可能性が高いと考えられます。その二代目寿庵の妻が、馬琴の長男・宗伯に嫁いだ路の叔母だったのです。路の父は土岐村元立という医者で、寿庵の妻はその血のつながらない妹でした。

川村寿庵とは何者か、興味は尽きません。今後も調査を続けますので、情報をお持ちの方はご一報いただければ幸いです。



「雑書」安永4年4月2日の記事(盛岡市中央公民館蔵)

「雑書」安永四年四月二日

一、上田永久申出候は、弟子三戸御給人川村理仲太伯父寿庵と申者、医学為稽古去々々召連罷登、御当地御町医安藤昌益方え差遣、稽古為仕候処、去々々より当夏迄三ヶ年、右昌益所差遣置稽古為仕度段申上、願之通被 仰付候、然処、伝受筋相残候付、昌益師匠御当地御町医川村快庵門弟罷成、昌益所に隨身仕候て修行罷有候処、右快庵当正月病死仕、老母并娘老人御座候、右娘え寿庵申合、快庵跡式相続為仕、老母介抱を得申度旨望申候間、差遣度段永久願書を以申出、願之通被 仰付、御用状申来、御役人共えも申渡之